

キーワードを入力

トップ

速報

映像

個人

特集

意識調査

ランキング

有料

主要

国内

国際

経済

エンタメ

スポーツ

IT

科学

ライフ

地域

抗不安薬や睡眠薬は増える一方...薬を見直す家族の働きかけ

12/22(日) 9:26配信

日刊
ゲンダイDIGITAL

病院で処方される睡眠薬と抗不安薬には、いくつかのグループがあるが、副作用で認知症のような症状が表れる可能性があるとなると問題となっているのは、ベンゾジアゼピン系と呼ばれるグループに属する薬だ。ベンゾ系の睡眠薬と抗不安薬は、持病の数が増えるにつれて増加傾向にある。一度、処方されると、53%は継続して処方されている。

診察時にはお薬手帳を

84歳の女性は、高血圧と脂質異常症のほか、頸椎の変形で首が痛み、不眠症もひどかった。軽い認知症もあり、内科と外科を掛け持ちし、降圧剤や脂質異常症の薬のほかにベンゾ系の2剤を含む合計15種類もの薬を服用していた。ところが、高齢者施設への入所をキッカケに、施設のスタッフが主治医や薬剤師らに相談して薬を見直すと、半分以下の6種類に。4回だった服用のタイミングも、朝食後と夕食後の2回になって、薬の飲み忘れもなくなったという。その見直しでベンゾ系の睡眠薬は、不要になったという。女性に代わって50歳の娘が言う。

「ベンゾ系の薬は、ゾルピデム錠とエチゾラム錠で、薬剤師さんの説明によると、副作用でふらつきが見られるとのことでした。母がよくふらついたのは、視力や足腰の問題とばかり思っていました。薬のせいだったんですね。薬をやめてからは、そんなにふらつくこともない気がします。施設の方によくしていただいているので、毎日楽しそうで、薬がなくてもよく眠れるようです」（ストレスケア日比谷クリニック院長の酒井和夫氏）

この女性は、施設への入所が薬を見直すキッカケになったが、知らず知らずのうちにベンゾ系の薬を重ねてしまっている人は、どうすればいいのか。

「家族の働きかけが、とても大切です。同じ薬が複数の医療機関で処方されている

ことを医師と薬剤師に相談し、薬の見直しをお願いするのです。絶対にやめてほしいのは自己判断で薬を突然、中止すること。ベンゾジアゼピン系の薬をやめるときは、医師の指示で少しずつ減らしていくのが鉄則。突然やめると、反動で不具合が生じやすいのです」(酒井氏)

「お薬手帳」は、重複処方を見つける手がかりになるが、人によっては医療機関ごとに手帳を使い分けていることがあるという。

そうすると、医師も薬剤師も重複処方を見つけられない。お薬手帳は、必ず1冊ですべての医療機関をカバーすることだ。

聖路加国際病院内科名誉医長で、「西崎クリニック」院長の西崎統氏が言う。

「ベンゾジアゼピン系の薬を別のグループの薬に切り替えるのも、ひとつの方法でしょう。たとえば抗不安薬ならアザピロン系、睡眠薬ならメラトニン系かオレキシニン系に。そのためには、医師にお薬手帳を見せることです」

在宅で介護サービスを受けているケースでは、介護スタッフや通所サービスの担当者に薬の確認をしてもらうのも重要だという。

【関連記事】

[飲み続けると事故リスクが上がる「抗不安薬」と「睡眠薬」うつ症状やふらつきが…「老年症候群」を治す薬の減らし方](#)
[海外報告では全体の2割が…「認知症」を起こす薬リスト](#)
[ストレスフルでもうつ病にならない人は腸内環境に理由あり](#)
[精神科医が語る「自殺者が少ない地域」7カ所の共通点](#)

最終更新:12/22(日) 9:26

日刊ゲンダイDIGITAL



こんな記事も読まれています